

オイゲン・フインクの世界の超越論的現象学

—カントおよび後期フッサールとの〈近さと隔たり〉—

池田 裕輔

1. はじめに

本論の目的は、オイゲン・フインクの哲学的構想を〈世界の超越論的現象学〉として規定することにある。本論は、一方で、フインク自身の構想の展開を下支えしている彼独自の〈宇宙論的〉カント解釈を確認し（第二節）、他方で、フインクと後期フッサールの構想の「近さと隔たり」¹を明らかにすることでこの課題を果たすものとする（第三節）。

しかしながら、本論の課題設定は、フインクに関する一部の先行研究のテーゼと両立しないものであるように見える。というのも、クロウェルに代表される論者は、フインクの哲学が超越論的現象学的なものではないと主張しているからである。すなわち、先行研究は、（1）フインクの哲学がヘーゲル的な〈弁証法〉を背景に持つものである限りで、カントに端を発する超越論的哲学の伝統を越えゆくものであり、（2）彼の哲学的方法が〈記述的〉である以上に〈思弁的〉なものである限りで、〈現象学的〉なものではないとしている（Crowell 2001, 244-263）。

本論の第二節では、「純粋理性の超越論的弁証論」、特に「宇宙論的アンチノミー」を集中的に取り上げるフインクのカント解釈が検討される。これを通じて、フインクの形而上学テーゼ（これは、彼が「様相問題（Modalitätenproblem）」と呼ぶものに関するものである）が、ヘーゲル的な「弁証法」とは様々な観点からみて相容れないカントの「弁証論」²（特に「世界」を巡るアンチノミー）解釈を背景として展開されたものであることがわかる。別様に述べれば、第二節で扱われる問いとは、次のものである：フインクの Dialektik—カントかヘーゲルか？ 本論の答えは、カントの弁証論である。

本論の第三節では、後期フッサールが取り組んでいる「世界の先所与性／世界が予め与えられていること（Vorgegebenheit der Welt）」をめぐる超越論的現象学的問題を、フインクは独自にどのように展開しているのかが明らかとされる。こ

の文脈で問題となる両者の違いは、彼らの依拠する方法が記述的（「明証・理論的（evidenz-theoretisch）」）なものであるのか思弁的（「原理・理論的（prinzipien-theoretisch）」）なものであるのかという点にあるのではない。むしろ、「世界の先所与性」、より正確には「世界化（Verweltlichung/Mundanisierung）」という表題を彼らと与える問題が、どのような現象に着目することで哲学的に解明されているのか、その現象学的分析の違いにこそ両者の「隔たり」が求められる。この主張を根拠づけるために、本論は、フィンクにおける「世界化の現象学（Phänomenologie der Mundanisierung）」（Fink 1966, 9）の構想の内実を、その展開が新たに切り拓いた独自の〈記述的次元〉という観点から簡潔に描き出す。本論は、クロウエルに代表される論者に反して、フィンクが後期フッサールの構想を引き継いだうえで独自に展開しようと試みる超越論的現象学者であることを明らかにするのである。

2. フィンクとカントの〈近さと隔たり〉

—フィンクの〈形而上学〉と宇宙論的カント解釈—

フィンクのカント解釈は、「宇宙論的（kosmologisch）」カント解釈であると特徴付けることができる。というのも、フィンクは、カントの主著である『純粋理性批判』が持つ最大の意義を、その「宇宙論的アンチノミー」、すなわち、同著が「世界」に関する形而上学的問題を新たな仕方で見出し、これに二律背反的定式を与えたことに求めるからである。しかしながら、フィンクは、『純粋理性批判』最大の貢献が、いわゆる「独断論的形而上学」としての「合理的宇宙論」の拒絶に集約されるというような消極的主張を掲げている訳ではない（周知のように、「合理的宇宙論」とは思弁的・論理的で非経験的な原理から実在世界の構築を目指すもので、カントは、「純粋理性」そのものが持つ二律背反的本性、あるいは人間的認識の有限性ゆえに、この課題は理論哲学の枠内では果たされ得ないとしている）。むしろ、フィンクは、このようなカントのアンチノミー論における「消極的成果」のうちに、「積極的意義」を見出そうとしている（Z-XX 7a und OH-III 2-4, quoted in: Bruzina 2006, 205）。というのも、彼によると、世界をめぐる形而上学的問題を独自に取り扱うカントは「存在の宇宙論的地平を切り拓いた形而上学者」とされるが、この「存在の宇宙論的地平」こそが、フィンク自身が独自に展開したい「新しい形而上学」にとって決定的な意義を持つものだからである（ibid.）。

2. 1 フィンクとカントの〈近さ〉

上記のことを、より正確に確認することとしたい。第一に指摘されるべきは、フィンクにとってのカントは、「〈存在〉一般の内世界的」性格、すなわち、「内世界的存在者」と「世界」の差異という「存在の宇宙論的地平」(ibid.)、後のフィンクが「宇宙論的差異 (kosmologische Differenz)」(Fink 1990, 19) と定式化する着想を提供する「形而上学者」だという点である。よく知られているように、カントは「現実存在する事物の絶対的全体性」(A419/B447)としての世界は、存在論的に「物自体」とも「経験の対象」あるいは「現出 (Erscheinung)」とも規定することができないとしている。カントに従うと、「世界」とは、むしろ、「超越論的理念」として規定されるべきものであり、この「超越論的理念」そのものは、存在論的にみると (すなわち、「それ自身としては (an sich)」「無 (nichts)」とされる(A501/B529)。このことから、「世界」は「虚焦点 (focus imaginarius)」(A644/B672)、つまり、理論的・思弁的な純粋理性の使用に際しての「発見術的虚構」(A771/B799)という必然的かつ有益ではあるが、あくまで人間的理性の本性にのみ由来する主観的な虚構 (当然、虚構は「それ自身としては無」である) とみなされる。例えば、有名な第一アンチノミー (世界は時間・空間的な始まりを持つのか、有限か無限かを巡るアンチノミー) を解消する為に、カントは自身の「超越論的観念論の教説」に依拠する。周知のように、カントは「現実存在する事物の絶対的全体性」としての「世界」は有限でも無限でもないとする訳だが、その理由は、何か有限もしくは無限であり得るものは、決して「無」ではなく「経験の対象」だ、というものである(A501/B529, cf. Fink 1990, 139)。そうであるので、カントは、フィンクにとって、「世界」そのものと「経験の対象」(「内世界的存在者」)の「宇宙論的差異」を洞察した最初の「形而上学者」なのであり、カントが「合理的宇宙論」を拒絶した根本的理由は、そもそも「前カント的形而上学の存在論」がこの「宇宙論的差異」を見過ごした点、つまり、「宇宙論的無差別／無関心 (kosmologische Indifferenz)」に囚われている点にあるとしている(Fink 1990, 185)。そして、フィンクは、この「宇宙論的無差別／無関心」のことを「世界忘却 (Weltvergessenheit)」と呼び、その発生の背景および根拠を執拗に検討している (ibid. 16-24, Fink 1957 40-52)—言い換えれば、フィンクは、カント的な「超越論的仮象」という問題設定を継承、独自に展開しているのである。

第二に、既に示唆したようにフィンクは、このような「形而上学者」としてのカントの洞察を手引きとすることで、彼独自の問題を展開しようとしている。フ

フィンクは上で触れた「存在の宇宙論的地平」という表現でもって、そのなかでのみ存在者が存在者（内世界的存在者）として現出しえるような地平のことを理解している。簡潔に言えば、フィンクの形而上学的テーゼとは、存在者（「現出」）は内世界的存在者としてのみ把握可能であり、これと相関して、「世界」は存在者（「現出」）に対して構成的なものだということである（従って、「世界」の存在様式の解明は、存在者の全体性を扱う形而上学の展開にとって構成的な条件を為す）。それでは、この着想をフィンクはどのような仕方で哲学的に正当化しているのだろうか。

2. 2 フィンクとカントの〈隔たり〉

ここで注意すべきは、フィンクにとって、「存在の宇宙論的地平」に基づく新たな形而上学の根本次元を切り拓いたのが他ならぬカントであったとしても（両者の〈近さ〉）、彼は、カントがその可能性を十全に展開したとみなしてはいないという事実である（〈隔たり〉）。フィンクは、特に、カントによる「主観主義的」（「超越論的観念論の教説」に依拠する）「アンチノミーの解消」案が問題含みであるとして、これを批判的に検討している（Fink 1990, 139-149）。結論から述べると、むしろ、フィンクは、「世界」概念を、その使用が統制的なものに制限されるべき主観的な「発見術的虚構」に過ぎないのではなく、むしろ、以下で明らかにされるように、「現実的に存在する地平であるとし、これこそが、あらゆる（レアルな）存在者が服すべき規範の根源に他ならない」としている。

フィンク自身の言葉を用いれば、「世界」とは、「存在と仮象の変転地平（Alternationshorizont von Sein und Schein）」（Fink 1988b, 91）である。フィンクは、この「変転地平」という表現でもって、そのうちで、そしてそのうちのみ存在者が、その都度の様相という観点—例えば、「存在」なのか「仮象」なのか—からして、まさに存在者として現出し得る地平のことを理解している。すなわち、あらゆる存在者は、それが単に存在者である限りで、その都度問題となる様相という観点から規定され得るものでなければならない—というの、それが〈存在する〉のでもなければ、〈存在しない〉のでもないのであれば、これは〈存在者〉ではなく、端的な〈カオス〉でしかないであろうから。この限りで、あらゆる

る存在者は、例えば、それが<存在する>のか(*entweder*)、それとも(*oder*) <存在しない> (「仮象」である) のかといった<規範>に服すのでなければならないが、この<規範>の根源こそが、フインクのいう「変転地平」としての「世界」の現実存在なのである。すなわち、フインクは、「世界」を、(フインクがいう限りでの) 主観主義と切り離せないカント的な<人間理性の批判>という方法を通じて哲学的に把握、解明するのではない(「世界」は、「純粹理性」が産み出した、必然的かつ不可避な「発見術的虚構」に過ぎないのではない)。そうではなく、フインクは、「存在の宇宙論的地平」そのものの哲学的・現象学的解明を通じて上記のテーゼを正当化するのである。

より具体的には、フインクは上記の着想を、彼が「様相問題」と呼ぶ問題の展開を通じて正当化している。すなわち、フインクは「世界」を、そのうちでのみ(レアルな)存在者がその様相(彼が特に集中的に検討するのは、現実的、虚構的といった存在様相および真理様相である)という観点から規定されることができるとみなしている(Fink 1959, 172-236)。簡潔に言えば、その着想は、存在者の様相は、それが有する存在論的性質等によってのみ規定されるのではなく、むしろ、根源的には、その存在者が属する世界という観点から明らかなるものとされるというものである。例えば、任意の虚構的存在者(ドラえもん)は、それに固有な存在論的性質(例えば、ドラえもんの特異な身体構造や彼が所有するタイムマシンやどこでもドアといった道具等)によってのみ虚構的存在者として規定されるのではなく、当該の存在者が、まさに<現実としての世界>には属さないという事実によってこそ虚構的存在者として存在論的に規定され、認識される(ドラえもんは、現実としての世界には住んでいない)。タイムトラベルが自然法則と両立不可能である(あるいは殆ど両立不可能なものである)と主張(少なくとも、有意味な仕方での両立不可能について議論)することができる為には、われわれが、そもそもどのような自然法則について語っているのかが明らかでなければならない。その(充分ではないにせよ)最も基礎的な答えとは、われわれの住まう現実世界の自然法則だ、というものであろう。そうであるならば、様相命題の「可能性の条件」や「地盤(Boden)」とは、世界そのものであり、それを認識する為の条件は、われわれ自身が様相という点からみた世界へと開かれていることである。よって、フインクの「様相問題」(「存在の宇宙論的地平」に基づく彼の「形而上学」)の根本テーゼとは、われわれの住まう現実世界こそが、様々

な様相とその変転(「様相化 (Modalisierung)」)の根源的地盤(人間理性の本性等、他の審級に還元して説明・正当化されることのない地盤)であるというものである。フィンク自身が1930年に書き残した簡潔なメモの表現に従うと次のようになる:

現実性(Wirklichkeit)は現実的事物に先んじる。現実存在する事物が存在するから現実性が存在するのではない(よって、色の場合とは異なる)。そうではなく、現実性が存在するからこそ、現実的事物は存在することができるのである(Fink 2008, 65, Z-VII, XVII/24b, 1930 in Chiavari)。

ここでいう「現実性」とは、後のフィンクのいう「世界現実性(Weltwirklichkeit)」のことである(Fink 1959, pp. 198-236, 1985, 105 etc.)。この「世界現実性」は、「現実存在する事物の絶対的全体性」と定義される世界に固有な特殊な一次節で確認するように、ある意味では現象学的な一アスペクトであるといえる。われわれの認識能力が有限なものであるなら、事物の全体(世界そのもの)を何人も認識し得ないこととなるのに対して(カントの洞察)、われわれが有意味な仕方では何らかの様相命題を言明したり確証したりすることができるのであれば(そして、われわれは、一般にこの事実そのものを疑う懐疑論的立場に立つ必要を認めないであろう)、上記のことから、フィンクのいう「世界現実性」としての世界は常にわれわれに対して「予め与えられている/先所与されている」こととなる(フィンクの洞察)。自由に言い換えれば、フィンクは、<なぜ、何ものかが存在するのか?>というライブニッツの問いに対して、<そもそも世界(「世界現実性」)が予め与えられているからだ>と答えると同時に、<なぜ、世界が存在するのか?>という更なる問いには、<仮に存在者が存在するならば(仮にカオスでないならば)、世界(コスモス)は必然的に予め与えられている>(そうでなければ、そもそも、「存在する/存在しない」といった様相判断が意味をなさない)、要するに、「世界」の存在の(いわば)仮言的必然性を主張する(cf. Fink 1959, 211-236)。そして、この仮定そのものが、何らかの高次の原理から導出・正当化されたものでないのであれば(<なぜ、カオスではなくコスモスなのか?>に対して「前カント的形

而上学」風の解答を用意し得ないとするのであれば)、要するに、この假定そのものが事実に妥当するというに過ぎない—フッサールがそう考えていたように、「世界無化」は思考可能な着想である(Hua III/1, 103-106)—のであれば、「世界」は端的に、事実に(あるいは偶然的)に与えられているに過ぎない(〈なぜ、世界が存在するのか?〉という問いは、〈なぜ、何ものかが存在するのか?〉とは異なり、そもそも答えがない)。いわば、「世界」は〈何故無し〉(事実に・偶然的)に(あるいは、理由(Grund)なき「遊び(Spiel)」として)存在するのであるが、「存在者がある／ない」といった様相命題が有意味に言明され得る限りで必然的に存在するのである(「[世界] 現実性は、[内世界的な] 現実の事物に先んじる」。本論では仮に、これを〈世界の事実に必然性〉テーゼと呼ぶものとしたい)。

次節で明らかにされるように、この(事実に・必然的に存在する)「世界現実性」は、フイックの〈形而上学〉のみならず、その〈現象学〉の主題をなすものである。簡潔にいうなら、フイックは、カントのことを真の「形而上学者」とみなすのであるが、その理由は、フイックが取り組む「世界現実性」の現象学的解明にとっての手引きとなる「存在の宇宙論的地平」をはじめて発見したのがカントに他ならないからである。

本節の成果をまとめたい。カントにおける世界とそのなかで現出する事物の存在論的差異に関する洞察(フイックのいう「宇宙論的差異」に関する洞察)は、カントによる人間理性の弁証論的本性という特種な有限性に関する洞察／前提を出発点としている—というのも、カントが証明するように、われわれは「物自体」としての世界そのものを認識することはできないのだから。フイックは、この(差し当たり、人間的認識に関する洞察に基づく)カントのテーゼを、それが、フイックの宇宙論的・存在論的、つまり、「存在の宇宙論的地平」としての「世界現実性」に関するテーゼ(〈世界の事実に必然性〉テーゼ)とその展開に導くものである限りで、形而上学的なもののみならず。すなわち、フイックを、「[世界] 現実性は、[内世界的な] 現実の事物に先んじる」というテーゼとその展開に導くのは「形而上学者カント」であった。よって、フイック自身の〈形而上学〉あるいは〈思弁〉は、カントにおける(フイックの表現でいうところの)「宇宙論的差異」およびこれと相関する人間理性の有限についての洞察を背景として展開されているのである。この限りで、「フイックの現象学」に関する次のようなクロウエルの

主張を承認することは難しいといえるであろう：

彼〔フィンク〕は現象学を、カントを越えてヘーゲルへと駆り立て、ヘーゲルの〈思弁的命題〉を示唆することで、パラドクスと矛盾を包括するようなく現象学的命題の理論〉を提案する(Crowell 2001, 259)。

これに対して、むしろ、フィンクにおいては、「ヘーゲルはカント [...] を超えてゆくことで、世界の問題を（見）失ってしまった」が為に厳しい批判に晒されることとなる(Fink 1990, 133-135)。フィンクのいう「宇宙論的差異」、「存在の宇宙論的地平」がカントにおける「世界」に関する洞察に根付くものである限りで、このようなヘーゲル批判が持つ意義は無視することはできないであろう。そして、クロウエルは、上記の彼の主張を根拠として、フィンクがカントの警告を無視して「超越論的仮象」の餌食となっているとするのであるが(Crowell 2001, 263)、本節で確認したように、むしろ、フィンクは「世界忘却」という表題のもと、独自の仕方ですべて「超越論的仮象」の問題を継承、展開しているのである。

3. フィンクと後期フッサールの〈近さと隔たり〉

—フィンクの〈現象学〉と新たな現象学的・記述的次元としての世界の発見—

前節では、フィンクの哲学においてどのような〈形而上学〉が問題とされているのかを確認した。その成果に従うと、フィンク自身の構想は、ヘーゲルというよりは、「形而上学者カント」の洞察、特にそのアンチノミーに関する洞察に多くを負うものであった。それでは、〈フィンクの現象学〉は、彼のいう「世界現実性」についての形而上学的洞察とどのように関係するものであるのだろうか。

3. 1 フィンクと後期フッサールの〈近さ〉

この問いへの手掛かりは、フィンクの1930年代初頭に記された遺稿草稿のうち既に明瞭に認めることができる：

世界の全体性 (Weltganzheit) に関する問い、これと相関して、世界意識 (Weltbewusstsein) に関する問いは、カントのアンチノミーの教説に即して

開陳されるべきである(Fink 2008, 95(Z-IX 14a), 1931年8月31日)。

フィンクが重点的に取り組む<現象学的>問題とは、「世界の全体性」に相關的な「世界意識」に関するものである。ここでの「世界の全体性」とは、既に確認したように、フィンクにおける形而上学の根本問題そのものであった。この意味で、<フィンクの現象学>が扱う主題は、「(世界) 現実性は現実的事物に先立つ」とする彼自身の形而上学的着想に導かれたものである。それでは、このような「世界意識」に関するフィンクの現象学的構想は、どのように性格づけられるべきものなのであろうか。

「世界意識」と「世界」そのものの相関性というテーゼは、晩年のフッサールにおける先所与された(予め与えられた)世界、あるいはその先所与性(予め与えられていること)という問題を想起させるものである(とりわけ、以下を参照 Hua VI, 154-155)。

①第一に確認されるべきは、この問題が「生活世界の経験」の解明と関連したものだということである。すなわち、「世界は、目覚め、常に何らかの仕方で実践的な関心を持ったわれわれに対して予め与えられている(先所与されている)」(Hua VI, 145)とされるが、その理由は、「事物」は、「われわれがこれを世界地平のうちにある事物あるいは客観として意識するという仕方でのみ、われわれに与えられる」(Hua VI, 146 強調引用者)点に求められている。

②第二に、そうであるので、「世界地平」は、そのうちにある存在者と存在論的に明確に区別されるのでなければならない。フッサール自身はこの点を、特にその特異な数的性格から把握しようとしている:「世界は、存在者や対象が現実存在するような仕方では現実存在しない。むしろ、世界は、その唯一性という仕方では存在するものであり、この唯一性は、これに対する複数性がそもそも意味をなさないようなものである。あらゆる複数性およびその複数性から獲得された単数性は、世界地平[の唯一性]を前提とする」(ibid.)。「世界地平」とは、そのうちで、そしてそのうちでのみ存在者(対象)が自身とは異なる存在者(対象)から数的に区別されることのできる究極的な次元のことであり、これに対して「世界地平」そのものは、その「唯一性」という観点からのみ特徴付けることができるのであ

る。

③第三の要点は、このような『危機』でのフッサールの存在論的テーゼは、それ自身が、「世界意識」についての現象学的分析の実行を要求するものだという点にある。というのも、「世界地平」と「何ものか (etwas) (内世界的な存在者)」は存在論的にみて根本的に異なるものであるのだから、「世界のなかの客観の存在様式と世界そのものの存在様式の差異は、当然、それぞれ根本的に異なる相関的な意識の様式に書き込まれている」(ibid.)こととなり、この限りで、「何ものかについての意識」(現象学における標準的意味での志向性)の現象学的分析が、「何ものか」の哲学的・存在論的解明の為に要求されるのと同様に、(問題の)「世界意識」の分析もまた、「世界」についての上述のテーゼの正当化の為に要求されることとなるからである。

ところで、「何ものかについての意識」としての「志向性」は、経験対象とその所与性様態のあいだの普遍的な相関性のアプリアリという表題のもと把握され、分析されるべきものであった(Hua VI, 169)。それでは、フッサールは、このような「何ものかについての意識」としての「志向性」とは明瞭に区別されるべき「世界意識」についての分析をどのようにして遂行しているのだろうか。

④最後に確認されるべき点は、この問いに対するフッサール自身による幾つかの示唆を、『危機』のなかで(本論では立ち入ることができないが、「世界の先所与性」及び「世界意識」の問題群と密接に関連する⁴)「人間的主観性の逆説」を扱う個所に認めることができるという点である(Hua VI, 185-190)。すなわち、フッサールは「逆説」解消に関連して、少なくとも以下に挙げる三つの異なる現象について言及している：(1) エゴ、(2) 間主観性の全体性、(3) 「目覚めた生」ないし、「目覚め」という現象。すなわち、この三つの現象こそが、フッサールが、「世界意識」の構成分析に際して記述的に獲得されるべき「超越論の手引き」に他ならない。よって、『危機』のフッサールは、「世界の先所与性」と「世界意識」の問題を解明するために、少なくとも三つの異なる方途を準備しているものと解釈することができる。すなわち、(1) 自我論的な方途、(2) 間主観性の分析による方途、(3) 「目覚めた生」(あるいは主観性の「目覚め」という現象の分析

による方途、これら三つである。ここで注意したいのは、『危機』の本文のなかだけでも三つの異なるアプローチが示唆されているにもかかわらず、フッサール自身は、最初のふたつの現象の分析にのみ集中しているという事実である。第三の方途が未展開である哲学的理由は、恐らく「目覚め／眠り」という現象が、フッサールの志向性分析にとっての「限界問題 (Grenzprobleme)」をなす主題群のひとつだという点に求められるべきであろう(Hua XLII, 9-65, cf. Ikeda 2016a, 2017)。

3. 2 フィンクと後期フッサールの〈隔たり〉

本論にとって上記の事実が重要であるのは、まさにこのような文脈でこそ〈フィンクの現象学〉と〈フッサールの現象学〉の「隔たり」が明瞭なものとなるからである。すなわち、フィンクは自身の師とは異なり、むしろ、第三の方途(人間的主観性の「目覚め」の現象の分析)の重要性を強調し、これを通じて、新しい現象学的な記述的次元を提供している。それでは、フィンクが、フッサールが主題化していない第三の方途を重視する理由はどこに求められるのであろうか。

簡単に言えば、その最大の理由は、世界と世界意識の「相関性」の分析に際して、フッサールがそうするように第一(自我論的分析)および第二(間主観性の分析)の方途を特権的に扱ってしまうと幾つかの根本的な哲学的困難に直面することとなるからである。一例に過ぎないのだが、以下のような諸難問である:(1) 意識の発生とは、それが何らかの(それ自身、意識とは全く異なる本性を有する)「無意識」的状态から発生することを意味するのだから、意識ないし超越論的主観性の「はじまり」と「終わり」、そしてその「誕生」と「死」という難問はどのように現象学的に解消され得るのであろうか(Fink 2006, 23(Z-I 24a), 348(Z-VI 30a-b))。(2) 現実存在する唯一的世界とは間主観性ないし超越論的主観性の世代的社会の具体的全体性の相関者であるというフッサールのテーゼは、どの程度まで哲学的に擁護できるものであり、また、このようなフッサールのテーゼはどのような存在論的前提を含むものなのであろうか(cf. Fink 2006, 23(Z-I 24a), 403(U-IV 47))。こういった難問が生じる理由は、恐らく、フッサールの超越論的観念論が、十全なレアリテートという観点からした現実存在する事物の全体性(カ

ントの存在論的規定に従った「世界」の構成に対して、超越論的主観性が、理念的には、十全に責任を負い得るのでなければならぬという前提のもと、構成分析に取り組むものだからであろうと思われる⁵。これが正しいのであれば、フッサールが、全体性としての世界が、たったひとつの主観（例えば、世界のなかの客観としては、今、必死に本論を記しているこの私）ではなく、十全な具体性としての超越論的間主観性と相関的であると主張する理由が明らかになる。というのも、たったひとつの主観もまた世界をそのレアリテートという観点から構成するものであるとしても、当然であるが、その構成の働きと成果は部分的なもの—世界の一部の構成—に過ぎないからである。実際、フィンクは、『第六デカルト的省察』（以下、『第六省察』）—その目的は、フィンク自身の思想の提示ではなく、あくまで、フッサールの超越論的現象学を、その「体系性」という観点から論じるものである—のなかでは、このようなフッサールの根本着想に忠実に従ったうえで、上記の「はじまりと終わり」といった「限界問題」(Fink 1988a, 67)を主題的に扱う部門として、「構築的現象学」の構想を形式的に素描している（先述のように、「限界問題」という問題構成自身は、あくまでフッサールの後期超越論的現象学に内在的なものである）。しかし、フィンク自身の思想という光のもとでは、上記のフッサールの前提は、宇宙論的に問題含みのものであることが露呈する。既にカントは『教授資格論文』で、「永遠に継起するあらゆるものの状態の汲み尽くすことのできない系列が、どのようにしてあらゆる変化を包括する全体 [=世界] へともたらされるのかを把握するのは困難である」(Kant 1958, 14)と洞察しており、ここでは立ち入ることはできないが、フィンクのカント解釈はこの『教授資格論文』の洞察と『純粹理性批判』の関係を詳細に扱っていた(Fink 1990, 43-87)。フッサールの文脈に置き換えれば、<志向的作用の全体>を、<全体についての意識>、すなわち「世界意識」として把握することは困難なのである(cf. Fink 2006, 348(Z-VI 30a))。「世界意識」が「客観についての原本的意識の<志向的変様>として」解釈されるならば、世界地平が世界地平として、フィンク自身の表現を用いれば、その「地平としての地平の構成的機能」という観点から現象学的に解明されるのは困難となる(Fink 2008, 32(XVII/1a))。簡潔にまとめれば、「世界意識」

は、標準的な意味での志向性（「何ものかについての意識」）としても、また、その集合や絶対的全体性としても解釈されてはならない。このようなフッサールの超越論的現象学に内在的な困難にフッサール以上に真剣かつ主題的に取り組もうとするからこそ、先の引用にあったように、フィンクは、世界の問題を「アンチノミー」として定式化し、また「存在の宇宙論的地平」（すなわち、「宇宙論的差異」）を切り拓いたカントに手掛かりを求めようとするのである。というのは、この「宇宙論的差異」こそが、「何ものかについての意識」との差異という観点から「世界意識」を現象学的に分析する為の（いわば）「超越論的手引き」となるからである。このことから、フィンクは上記の第三の方途（＜目覚めの現象学＞）を展開しようとする。

その理由をより正確に確認したい。第一に、既にみたように、フッサール自身が人間的主観性の「目覚め」（「目覚めた生」）を、世界の先所与性の＜可能性の条件＞とみなしており（もし、誰も世界へと「目覚め」ておらず、よって、その「世界のなかへと入り込んで生き（in die Welt hineinleben）」ていないのであれば、そもそも、「世界の先所与性」について有意味に語るができないのだから）、そして、第二に、仮に主観性が、有意味かつ真に＜目覚めている＞といえるのであれば、その際、当の主観性は、自身に固有な私的な世界（例えば、夢の世界）ではなく、ヘラクレイトスや（これを受けた）カントの表現でいえば、「唯一の共同世界（ἓνα καὶ κοινὸν κόσμον/die gemeinsame Welt）」（Fr. B. 89, Kant 1905, 342）へと＜目覚めている＞べきだからである⁶。フィンクは、この「目覚め」と（先所与されている）「唯一の共同世界」という特種な相関性の事実を、「一次的（本来的）世界化」⁷と呼び、これを「自然的態度の根源」（Fink 1966, 11）としている。そして、この「一次的世界化」は、「世界を現実化するという仕方で構成する主観性が自己を現実化すること（*Selbstverwirklichung der konstituierenden Subjektivität in der Weltverwirklichung*）」（Fink 1988a, 49）であるとされる。すなわち、このような「世界化」こそが、構成的なものとしての主観性が世界—予め与えられており、よって、現象学的命法に従って構成分析に付されるべき世界—に対して目覚めるその様式である。それでは、フィンクは、「世界化」という次元からみた「目覚め」と

いう現象を、具体的にはどのような仕方で分析しているのであろうか。

フィンクは、目覚めの現象を、その多様な様態という観点から記述することで、この課題を遂行している。フィンクの記述的分析は、基本的に次に挙げるふたつの着想に基づいて展開されている。第一に、フィンクによると、あらゆる（それ自身として区別されるべき）多様な目覚めの現象は、それらに共通するものとして彼が「世界へと入り込んで生きること *In-die-Welt-hineinleben*」ないしは「のめり込み (*Versunkenheit, versunken-in*)」と呼ぶ構造を備えている (Fink 1966, 11-12)。第二に、これと対応して、この「のめり込み」の様態の多様性を分節化できる場合にのみ、目覚めの多様な様態をそれぞれ現象学的に区別することができる。フィンクは主張している(cf. Ikeda 2016a, 2016b)。この着想を具体的に理解するには、差し当たり、フィンクの処女論文「現前化と像」(Fink 1966, 1-78)で分析される多様な現象のなかから「病的な幻覚」の例を挙げるだけで充分であろう：当人が、「幻覚の世界」を幻覚の世界として自覚できないほどに深く（よって、「病的」な仕方で）、その「幻覚の世界」に「のめり込んでいる」という事実を指摘することで、われわれは「病的な幻覚」における特異な「目覚め」方を、その「のめり込み」という構造に即して記述、抽出することができるからである(ibid.54-55)。要するに、フィンクは「病的な幻覚」を、その特異な「目覚め」の様態という観点から分析するのであり、このことは、彼が分析しているのは、「病的な幻覚」に伴う、例えば、そこには居ない人物といった特定の不在の対象の「与えられ方」なのではなく、全体としての「病的な幻覚」そのもの、すなわち「病的な幻覚世界」に固有なその「与えられ方」としての「目覚め」方に他ならないということである。これに対して、われわれ自身は普通（仮にわれわれが「病的な幻覚」にとらわれていないのであれば）、現実世界に「目覚めて」おり、「現実世界」へと「のめり込んで」いる。そうであるならば、この「現実世界」への「目覚め」と「病的な幻覚世界」への「目覚め」の差異は、それぞれの世界に固有な「与えられ方」の差異として分析できる筈である。そして、このような「のめり込み」あるいは「目覚め」の様々な様態を記述的に分節化することで、「世界意識」の構成分析の為の手引きを獲得することができる。すなわち、本節の問題関心からしたくフィ

ンクの現象学>の根本主張とは、「世界」（「世界現実性」としての「世界（*die Welt*）」や「病的な幻覚世界」とそれらそれぞれに固有な「与えられ方」（それへの「のめり込み」方）のあいだに成り立つ「普遍的相関性のアプリアリ」という観点からこそ、「世界意識」は超越論的現象学的に解明されることができるというものである。このような課題の包括的表題こそが、彼のいう「世界化の現象学」なのである。

そして、「世界化の現象学」の究極的な課題が、「世界現実性」としての唯一的な「世界」の「与えられ方」の現象学的解明である限りで、既に触れたように、フイックがこのような「世界化」のことを「自然的態度の根源」としている理由をより明確にできる。言い換えれば、「世界化の現象学」とは、フッサールが「一般定立」、「原信憑」や「原ドクサ」といった表現で呼ぶ、（別の態度に還元することで説明も正当化もできないという意味で）根源的な理性的態度を、その「与えられ方」としての「自覚め」の多様性の現象的・記述的分析を基礎として構成分析に付すものである。そして、このような「自然的態度の根源」としての「世界化」の根源性は、前節で確認した「[世界] 現実性は現実的事物に先んじる」というフイックの形而上学的テーゼ、<世界の事実に必然性>のテーゼと関連するものとして示されることとなる。すなわち、仮にわれわれが任意の対象を「虚構」、別の対象を「現実」とし、これらについて有意味な仕方でも語り、また論争することができるのであれば、その際、それらの様相的区別がなされる「存在と仮象の変転地平」（「問いの地盤」）としての「世界」（「世界現実性」）が必然的に予め与えられている（しかし、この先所与性そのものは、それ自身として一現象学が、例えば、神による世界創造説等に訴えないのであれば一更なる理由づけを拒むものである限りで、事実に・偶然的な「原事実（*Urfaktum/Urtatsache*）」である）。やや極端な例ではあるが、ドン・キホーテとサンチョ・パンサは、眼前の巨大な事物が「巨人」であるのか散文的な「風車」に過ぎないのかを論争し、ドン・キホーテはこれに向かって突撃することで論争の対象が「風車」であることを（彼にとっては残念なこと）に検証・証明している（ドン・キホーテは、サンチョ・パンサに対してそれが「風車」に過ぎなかったことを明確に認めており、よって、

彼を単なる狂人であるとする解釈は採用し難い⁸⁾。このことは、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの論争が、究極的には「世界 (*die Welt*)」をめぐる論争であることを示す。従って、ここでの「世界」とは、有意味な仕方で「真理」についての論争が成り立ちかつその検証が可能である為に受け入れられるべき規範なのである。この限りで、〈世界の事実に必然性〉は、単に主観的な世界解釈(例：ドン・キホーテの騎士道文学に基づく世界解釈やサンチョ・パンサの差し当たり散文的な世界解釈)に還元されることもできなければ、その構成分析によって根拠づけられるものでもなく(あるいは、カントがというような主観的虚構なのではなく)、むしろ、これらを拘束し、可能化する規範であり、その根源・由来とは、(「世界現実性」としての)世界が存在するという事実以外の何ものでもない。よって、前節で確認した「様相問題」をめぐるフィンクの宇宙論的・形而上学的根本テーゼを、このような規範の与えられ方／規範への服し方という観点から—これは、現象的には、世界への「のめり込み」方あるいは「目覚め」方として記述的に摘出される—超越論的現象学的に解明・正当化することこそが、「世界」とその「与えられ方」のあいだの「普遍的相関性のアプリアリ」を解明するフィンクの「世界化の現象学」の根本課題なのである。

フッサールにとって、(様相)命題は「客観化作用」としての志向性—その真理確証機能は、「充実化」という表題のもとで解明される—に基づくものであるのだから、フィンクは、このような志向的作用そのものの〈可能性の条件〉—その規範的根拠—とは、「世界化」という次元で生じる「世界意識」としての「目覚め」に他ならないという超越論的現象学的テーゼを明確に提出するものである。このような意味で、「世界意識」は志向的作用の全体性には還元されることができない。むしろ、「世界意識」とは、個々の志向性とその都度の様相という点からした対象を確証することができる為の「地盤」ないし「地平」なのである(cf. Fink 1988b, 91)。まとめると、(1)「客観化作用」としての「何ものかについての意識」は、「世界意識」に基づいてのみ、「客観化作用」たり得るのであり、この限りで、「世界意識」は「志向性」に「先んじる」といえるが、このフィンクの現象学的テーゼは、「[世界] 現実性は現実的事物に先んじる」というフィンクの宇宙論的・形而上学

的テーゼと相関的に理解されるべきである。(2) よって、「何ものかについての意識」としての「志向性」と「世界意識」は、明確に区別されるべき機能を担っていることとなるが、この区別は、フインクの現象学的テーゼに従うと、それぞれが「経験対象とその与えられ方の普遍的相関性のアプリアリ」(Hua VI, 169)、そして、「世界」とその「与えられ方」(「のめり込み」あるいは「目覚め」)のあいだに成り立つ「普遍的相関性のアプリアリ」(あるいは、「世界」とそれへの「のめり込み」の多様な「遂行様態 (Vollzugsmodi) 」) という観点から現象学的に解明されることによって正当化され、それぞれに固有な権利が示されることとなるのである。フインクの語る「(一次的・本来的) 世界化」とは、「目覚め」の(いわば)「本来的」な様態のことであり、これは、われわれが世界と真に向き合う態度のことなのである。

本節の成果に基づいて、ふたつの結論を導くことができる。第一に、フインクが、世界の「与えられ方(あるいは先所与性)」を、これと相関的な(志向的作用の全体性に還元されることのできない)「世界意識」という観点から分析している限りで、よって、フインクが現象学的な仕方で新たな記述的次元を発見した限りで、フインクの哲学そのものを単に「思弁的(原理・理論的)」なものとして性格づけることはできない。第二に、フインクが、このような新たな記述的次元の発見とその解明を通じて後期フッサールの構想に対して内在的な困難に対処している限りで、フインクは、フッサール以上に、その構想そのものに忠実であるといえ、必要であれば、この点でフインクは、フッサール以上に<現象学的>ということさえできる。クロウエルがこれとは真逆の主張を擁護しようとしている理由は、彼が、フインク自身の構想を提示する場でもなければ、よって本論で確認したような「世界化」あるいは「目覚め」に関する具体的分析を一切行っていない『第六省察』のみを注釈・検討することで一般的テーゼを引き出そうとしていることに求められるであろう。『第六省察』でのフインクは、反対に、フッサールの「現象学の現象学」という「超越論的方法論」の理念を、あくまで概念的な仕方で展開しようとするものだからである。

4. 結論

第二節では、簡潔にフインクによる〈宇宙論的カント解釈〉が確認され、これが、世界に固有な存在論的特徴（「宇宙論的差異」）と人間理性の持つ弁証論的本性およびその有限性というカントの洞察を解釈の中心に据えるものであることが示された。これを通じて、フインクがヘーゲルの「弁証法」に容易に追随できない理由が明らかとなった。というのも、既に確認したようにヘーゲルの思弁は、「カント […] を超えてゆくことで、世界の問題を（見）失ってしまった」（Fink 1990, 134）のであるから、カントにおける世界をめぐる形而上学的問題の独自の展開を自身の課題とみなすフインクにとって、ヘーゲルに追随することは、自身の出発点と問題設定そのものを拒否することと同義となるからである。このような限りで、フインクはヘーゲルの思弁的弁証法ではなく、むしろ、カントの超越論的弁証論を出発点として自身の「思弁／形而上学」を展開している。

第三節では、フインクと後期フッサールのあいだの〈近さと隔たり〉が描き出された。ここで明らかとなったのは、両者の〈隔たり〉は、それぞれが用いる方法が記述的（「明証・理論的」）であるのか思弁的（「原理・理論的」）であるのかという点ではなく、「世界の先所与性」、そして、彼らが「世界化」と呼ぶ現象が現象学的にどのように解明されているのかという点にこそ求められるという事実であった。フッサールがこの問題を主に「自我論的」および「間主観性」の分析という方途によって扱おうとしているのに対して、フインクは「世界化」の現象を、世界そのものをその与えられ方という点から現象学的に記述することで明らかにしている。確認したように、彼は「世界化」の現象を「目覚め」や「世界のうちへと入り込んで生きること」が持つ固有の構造として規定し、これらは、志向性が対象の様相に対して構成的であることができる限りで、志向性そのものの〈可能性の条件〉、より正確には「地盤」とする。すなわち、世界がそもそも存在しないのであれば、いかなる（志向的）対象も、その様相を規定し得ない限りで、「（世界）現実性は（内世界的な）現実の事物に先んじる」のであり（フインクの形而上学的主張）、これと相関して、「世界の先所与性（予め与えられていること）」という事実そのものの構成分析は、「目覚め」という現象の多様な様態の現象学的分析を通じて遂行されるのである（フインクの超越論的現象学的テーゼ）。

このようにフインクの哲学は、主に後期フッサールとの緊張関係から規定される〈現象学的〉なものであり、その主題概念は〈世界〉であった。そして、この

〈世界〉を巡る形而上学の問題（「存在の宇宙論的地平」）をはじめて開陳したのがカントであり、彼を現代に至る最も広い意味での〈超越論的哲学〉の伝統の創始者とみなすことができる限りで、本論は、フィンクの構想を〈世界の超越論的現象学〉と名付けるものである。

¹ この「近さと隔たり Nähe und Distanz」という表現は、フィンク自身が、その死後に出版されることとなる自身の現象学に関する講演・論文集のタイトルとして提案したものである(Fink 1976, 323-324)。

² 例えば、カントとヘーゲルの「弁証論／弁証法」の根本的差異の一端は、カントが自身の弁証論の展開に際して、人間的理性の有限性という点を強調するものであるのに対して、ヘーゲルの思弁的弁証法が「自然と有限な精神の創造以前の神の思惟の開陳」(Hegel 1986, 44)そのものに他ならない点などに求めることができるだろう。

³ 現象学の側からなされた「事實的必然性」をめぐる形而上学的議論に関しては、Tengelyi (2014)を参照。

⁴ この点に関しては、Ikeda(2016a)を参照。

⁵ 例えば、フィンクは、「〈存在〉に関するフッサールの本当のテーゼは、〈現象学的還元〉、すなわち、存在者の被構成性テーゼ〔存在者とは構成されたものであるというテーゼ〕である」(Fink 2008, 140 (Z-XI 7a))と述べている。

⁶ ここで〈べき〉と強調するのは、この文が事実ではなく、むしろ、広い意味での規範についての命題だからである（言い換えれば、これは、〈目覚め〉が〈目覚め〉として承認されるための基準を明示するものである）。

⁷ 「一次的世界化」（あるいは「本来的世界化」）とは、現実世界へと主観が目覚める様式のことである。これに対して、フィンクのいう「二次的世界化」（あるいは「非本来的世界化」）とは、現象学的な直観あるいは真理を自然言語によって表現する様式のことである。本論は世界の先所与性の超越論的な構成問題という観点からフィンク思想を検討するものであるので、ここで超越論的現象学の方法論的問題—これが「超越論的方法論の理念」という副題を持つ『第六省察』の課題である—である「二次的世界化」について詳解する必要は認められない。

⁸ ドン・キホーテを「単なる狂人」とみなす解釈が保持し難い点に関する詳細な専門的研究としては、テキスト内在的読解および『ドン・キホーテ』解釈史の批判的検討というふたつのアプローチを採用する牛島の研究 Ushijima (1989)を参照。

[参考文献]

- Bruzina, Ronald. (2006). Hinter der ausgeschriebenen Finkschen Meditation: Meontik-Pädagogik. In A. Böhmer (Eds.) *Eugen Fink Sozialphilosophie Anthropologie Kosmologie Pädagogik Methodik*. Würzburg, Königshausen und Neumann, 193-219.
- Crowell, Steven Galt (2001). *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning. Paths toward Transcendental Phenomenology*. Evanston, Illinois, Northwestern University Press.
- Fink, Eugen (1959). *Alles und Nichts Ein Umweg zur Philosophie*. Den Haag, Martinus Nijhoff.
- (1966). *Studien zur Phänomenologie 1930-1939*. Den Haag, Martinus Nijhoff.
- (1985). *Einleitung in die Philosophie*. Würzburg, Königshausen und Neumann.
- (1988). *Husserliana-Dokumente II/1. VI. Cartesianische Meditation. Teil 1. Die Idee einer transzendentalen Methodenkehre* (Hua Dok II/1). Dordrecht, Kluwer Academic Publisher.
- (1990). *Welt und Endlichkeit*. Würzburg, Königs und Neumann.

- (2006). *Phänomenologische Werkstatt Bd.1. Die Doktorarbeit und erste Assistenzjahre bei Husserl (Gesamtausgabe, Bd. 3, Teilbd. 1)*. Freiburg/München, Karl Alber.
- (2008). *Phänomenologische Werkstatt Bd.2. Die Bernauer Manuskripte Cartesianische Meditationen und System der phänomenologischen Philosophie (Gesamtausgabe, Bd. 3, Teilbd. 2)*. Freiburg/München, Karl Alber.
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich. (1986). *Wissenschaft der Logik I. Erster Teil. Die objektive Logik Erstes Buch*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.
- Husserl, Edmund (1954). *Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie (Hua VI)*. Den Haag, Martinus Nijhoff.
- (1976): *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. Husserliana Bd. III/1. Karl Schuhmann (Ed.), Den Haag: Martinus Nijhoff, 1976.
- Ikeda, Yusuke (2015). Eugen Finks Kant-Interpretation, *Horizon Tom 4(2)*, 154-185. DOI: 10.18199/2226-5260-2015-4-2-154-185.
- (2016a). 「フッサールとフインクにおける世界の必然性と偶然性」、米虫正巳 (編) 『フランス現象学の現在』、法政大学出版局、2016年、43-75。
- (2016b). 「フインクの世界根源の現象学」、『現象学年報』第32号、67-76。
- (2017). 「オイゲン・フインクの現象学的カント解釈について (前編)」、『立命館哲学』第28集、61-86。
- Kant, Immanuel (1905): “Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik”. In: *Immanuel Kant Gesammelte Schriften Bd.2, Vorkritische Schriften II*. Berlin: De Gruyter, 315-373.
- (1958): *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*. Hamburg: Felix Meiner.
- (1998): *Kritik der reinen Vernunft*. Hamburg: Felix Meiner.
- Ushijima, Nobuaki (1989). 『反＝ドン・キホーテ論 セルバンテスの方法を求めて』、弘文堂。
- Tengelyi, László (2014): *Welt und Unendlichkeit. Zum Problem der phänomenologischen Metaphysik*. München/Freiburg: Karl Alber.